

一ノ七、今昔物語集卷第十一

天智天皇御子始笠置寺語第三十

出典 天智天皇御子始笠置寺語第三十（新日本古典文学大系三五）

解説 この有名な説話集は院政初期、即ち十一世紀末頃に成立した。ここに笠置寺縁起とほぼ同内容の笠置寺弥勒像造頭の謂れが記されている。

今昔。天智天皇ノ御代ニ、御子在マシケリ。心ニ智リ有テ才賢カリケリ。文ノ道ヲバ極テ好ミ給ケル。詩賦ヲ造ル事ハ、此御子ノ時ヨリゾ此国ニハ始マリケル。亦、田獵ヲ好テ猪・鹿ヲ殺ス事ヲ朝暮ノ役トセリ。常ニ身ニ弓箭ヲ帶シ、軍ヲ引具シテ、山ヲ籠メ〇纏テ、獸ヲ令狩。

然ル間、山城ノ国、相楽ノ郡、賀〇（茂？）ノ郷ノ東ニ有ル山辺ヲ狩リ行クニ、山ノ斜ニ登タル所ヲ、皇子駿馬ニ乗テ鹿ニ付テ馳セ登リ給フニ、鹿ハ東ヲ指テ逃グレバ、我レハ鹿ノ尻ニ次テ馳セテ、鐙ヲ踏ミ扞テ弓ヲ引ク程ニ、鹿俄ニ失ヌ。倒ルヽナメリト見ルニ、鹿ニ見ヘズ。「早ク、岸ノ有ケルヨリ落ヌル也」ト思テ、弓ヲ投ケ棄テ手繩ヲ引ト云ヘドモ、走リ立タル馬ナレバ、輒ク不ニ留ラズ。早ク、遙ニ高キ岸ヨリ鹿ハ落ヌル也ケリ。

此乗タル馬走リ早マリテ、鹿ノ如ク既ニ可落キガ、四ノ足ヲ同所ニ踏テ、少シ指出タル巖ノ崎ニ立ニタリ。馬ヲ折返サムニモ所モ無シ。馬ヨリ下リムト為ルニモ、鐙ノ下ハ遙ナル谷ニテ有レバ、可下キ所無シ。馬少シ動カバ落入ナムトス。谷ヲ下セバ十余丈許ナル下〇（若石？）也。見ルニ目モ暗レテ、谷底モ不見エ。東西モ忘レヌ。魂ヲイツキ心騒テ、只今馬ト共ニ死ナムトス。然レバ、皇子歎テ云ク、「若シ此所ニ座セバ、山神等、我方命ヲ助ケ給ヘ。然ラバ此巖ノ喬ニ弥勒像ヲ刻ミ奉ラム」ト願ヲ発スニ、即チ其驗ニ、馬、尻ヘ逆サマニ退テ広所ニ立ヌ。

其時皇子馬ヨリ下テ泣々伏シ礼ミ、後ニ来テ尋ム注シニ見ムガ為ニ、着給ヘル藺笠ヲ脱テ置テ返ヌ。

其後一兩日ヲ経テ、其所ニ置シ所ノ笠ヲ尋テ至ヌ。山ノ頂ヨリ下テ、巖ノ腰ヲ廻リ経テ、麓ノ砌ニ至ヌ。上様ヲ見上グレバ、目モ不及、雲ヲ見ルガ如シ。皇子心ニ思ヒ煩テ、山ノ腹ヲ指テ、其面ニ弥勒ノ像ヲ彫リ奉ラムト為ルニ力無シ。

其時ニ、天人是ヲ哀ビ助ケテ、忽ニ此仏ヲ刻ミ彫リ奉ル。其間、俄ニ黒キ雲覆テ暗キ夜ノ如ク成ヌ。其暗キ中ニ少キ石ノ多ク進ル音聞ユ。暫許有テ、雲去リ霞晴テ明カニ成ヌ。

其時ニ、皇子仰テ巖ノ上ヲ見給フニ、弥勒ノ像、其形チ鮮ニシテ彫リ奉リタリ。皇子是ヲ見テ、泣々恭敬礼拝シテ返給ヌ。

其ヨリ後、是ヲ笠置寺ト云、是也。笠ヲ注ニ置タレバ、笠置ト可云也。其レヲ只和カニ、カサギトハ云也ケリ。

実ニ、世ノ末、希有ノ仏ニ在マス。世ノ中ノ人專ニ可崇奉シ。「僅ニ歩ヲ運ビ首ヲ低ケム人、必ズ觀卒の内院ニ生、弥勒ノ出世ニ値ム口殖ツ」ト可頼キ也。

此寺ハ、弥勒彫頭シ奉テ後、程ヲ経テ良弁僧正ト云フ人ノ見付ケ奉テ、其後ヨリ行ヒ始タルゾト人云フ。其ヨリナム堂共ヲ造リ房舎ヲ造リ重テ、僧共多ク住シテ行フ也トゾ語り伝ヘタルトヤ。